

# 「夜」

10時から50分だけの幸せな時間を通せなかった。偶然の出来事だったとはいえ、やっぱり自分に負けてしまったんですね。誰も責められません」

いきなりこう語った、その言葉の意味が最初は理解できなかった。失意と後悔の感情が強すぎて、理路整然と話すことを妨げているのだろう、と相談者のいかにも真面目な表情から読み取ることができなかったが…。

## 部下の信頼厚く頑張る 工場の30代リーダー職

首都圏郊外の静かな町。田畑が広がるのどかな町だったが、誘致運動が実を結んで周辺に工場が増えてきた。相談者は、そのひとつ、機械部品工場に勤める30代のリーダー職の男性Sさん。妻も同じ工場の社員食堂でパートとして働いている。小学校低学年と幼稚園児の二人の男の子の世話は近くに住む妻の実家の両親に手伝ってもらっている。同僚より早くリーダーになり、リーダー職は間もなく2年。幸せな家庭にも恵まれて、職場内でもうらやましがられる存在だった。

# パチンコ依存

第7回

## 新「相談現場からの報告」

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

# 退職中の元部下の依存を 心配してホール訪ね探し…

工場は、早番と遅番のシフト制。朝8時から午後5時、午後4時から深夜12時までが基本。マネジャー職になるとこのシフト勤務からは開放されるが、リーダー職は一般社員と勤務体制は変わらない。部下指導や、作業状況の把握、工程管理なども加わり、早番といっても簡単には帰れない。

週1回は夜9時ごろまで調整勤務があり、不定期ながらサービスク残業もあった。さらに出世していくために誰もが経験する試練の時とSさんは自分に言い聞かせたし、上司からも「まあもう少しの辛抱だ。君ならできる。頑張れ」と言われ続けた。事実、部下思いの指導ぶりには定評があり、部下からも信頼が厚く、なにかにつけて相談相手になっていた。

## 誰にも負けまいと焦り 同職場の妻との会話も

「夜10時から50分だけの幸せな時間」というのは、残業などで退社が遅くなった時に立ち寄るパチンコ店で過ごす時間だった。

会社から自宅まで車で30分ほど。ほとんどがマイカー通勤の工場従業員の中でも平均的な所要時間だ。

った。なぜそのまま帰宅しなかったのか。この疑問はだれもが感じるだろう。思うままに質問してみた――

「退社が遅くなったのだからそのまま帰宅を急ぐのが普通だと思うけれどね」

「そうですね。その通りだと思います」

「それがなぜ？」

「ええ、職場では仕事に追われ、自分ひとりの時間がなかなかありませんでした。リーダーになる前は雑用がなく、休憩時間もちゃんととれたのですが、いまはそれ思うようになりません。家は確かに落ち着く場所ですが、夜が遅いと子供たちも寝ていきますから、妻だけが相手をしてくれます。お互い同じ職場ですから、その日にあったことなどを話し合います」

「いいじゃないですか。共通の話題があつて」

「ええ、しかし、時々はそれも煩わしくなることがあるんです。もう職場に係る話はしたくないという気持ちです。妻は私の仕事を具体的には分かりませんが、話し合っていると、ついその日の嫌なことも浮かんできます。本当は、

職場ではいいリーダーになろう、誰にも負けてはいけない、と焦っていたんです。みんなに気づかれないようにふるまっているのも辛かったんです」

### 閉店までの50分間は干渉されないひと時

「それとパチンコとどうつながるのかな」

「ええ、そんな一人芝居から抜け出したかったんです。ちよつとの時間でも」

「それが50分のパチンコだった……」

「そうですね。工場から自宅までの途中にあるパチンコ店は夜10時50分が閉店時間でした。ここでちよつと休んで行こう、そんな軽い気持ちでした。入るのは毎回同じ時間ではありませんが大体10時ごろです。パチンコは若い頃から何度か経験がありました。勝負を意識したこともありましたが、今回は、そんな気持ちではなく、あの場所なら一人になれる。誰からも干渉されないと思っていたんです。わずか50分、久しぶりに味わう幸せなひとときでした。まあ5千円ぐらいなら、たまには1万円でもいいか、という感じでした。もちろん毎日

行くわけではありませんでしたから。週1回ぐらい、という心づもりでした。事実、かなりの期間がそうでした」

「しかし、それだけではすまなかつた？」

少し間をおいた質問に対してすぐに返事はこなかった。Sさんは視線を落とし、ちよつと口を閉じた。眉間にしわを寄せて考え込むような表情だった。やがて、「それだけではすまなかつた」理由がポツリポツリ明らかになっていった。

### 職場で重傷の元部下を夜遅くホールで見かけ

閉店前の50分。さすがに満員ではない。かなり出費したのだろうか。この時間になっても、顔を紅潮させ、台に顔が触れるように近づいて手首を動かしている人がいた。

あのようにはなりたくないな。勝負を意識しない短い時間だから、自分には関係ない、と言い聞かせ、週1回のペースで「幸せな孤独」を楽しんだ。

ある夜、無表情で時計を見ながら台に向かっている若者に気づい

た。横顔を見てびっくりした。一年前に隣の部署に異動した、かつての部下Mだった。独身で一人暮らしのはずだ。見つからないように移動してそのまま店を出た。

確か、彼は仕事場の事故で重傷を負い休職中ではなかったか。1か月以上入院が必要と聞いていた。もう退院したのか。それはそれでいいことだが、夜遅くまでパチンコをやっているとは……。Mの上司に伝えようと思ったが、自分が帰宅途中にパチンコ店にいることが分かってしまうことは避けたかった。何も悪い事ではないが、会社の誰かに知られれば、すぐ職場内に広がってしまうだろう。そうなるとう妻の耳にも入る。それもまずい。波風が立たないようにしなければいけない。

### 静養を説得するために直接会って言おうとし

SさんがそこまでMのことを気遣うのには、単にかつての部下ということ以外にも理由があった。当初Mは異動を拒んでいた。それを説得したのがSさんだった。自分のところに置いて指導したかったが、幅広い技術を身につけさせ

たくて、より高度な仕事ができる部署に送り込んだのだった。それが大事故という結果になった。すべてがMのせいではないが、機械の下敷きになって腰椎骨折という重傷を負った。

Mの休職中の夜のパチンコという行動から、「けがに苛立って通い詰めているのでは」という考えがSさんの頭をよぎった。多分、日中でもパチンコ店にいるかもしれない、と考えたSさんは、公休の日、夜勤の前に店をのぞき始めた。直接会って、まだしばらくは静養するように説得したい。近くには両親が住む実家もある。パチンコ店にいる理由がつかめないまま、自分のかつての部下への親切心が募っていくばかりだった。

### 見つけられなかったが止めるはずはないと…

しかし、何回か日中の店をのぞいてもMの姿はなかった。そういえば、夜10時台にもあれつきり見かけることはなかった。あの時のMの態度から、パチンコをやめることは考えられない、というのがSさんの勘だった。

ある日の職場の午後。休憩室に

顔を出した。Mと同年齢の仲間の中に入り、最初はさりげない仕事の話、そして雑談をした。毎週1回ぐらいはこのような行動をしていたので誰も疑うような表情はしないで、むしろ歓迎してくれた。

「みんな、パチンコをする時どこに行くのかな。自分が家に帰る途中にある店なら知っているけれど」

「リーダーもやるんですか？」

「ああ、たまにはね。ストレス発散の遊びだよ。遊び」

「分かってますよ。リーダーがのめりこむなんて考えられませんから。いまリーダーが話した店以外では、ちょっと遠いけれど反対側の国道沿いに3軒ほど並んでいるのは知っていますよ。あつちに新しく自動車関係の工場が建ったので」

別の社員も続いた。

「でもこここの工場の連中はあまり行かないようだね」

「国道の向こうから通勤している人も少ないし。様子見つてとこかな」

### 探しに行った店で大勝ち欲が出て通い始めたのが

そんな会話があった数日後の休日、Sさんは3軒の新しい店の中でも一番はずれの店に入った。いきなり人を探すために歩き回ることは避けて、まず空いている台に向かった。

勝とうという意識がなかったせいか、気軽に手が動いた。周囲の視線を感じるほど、あつちというまに当たりが続いた。Mがいるかもしれない、という最初の入店の目的も忘れて台に向かい続けた。家族には内緒だったので、長居はま

ずいと考え、惜しいとは思いつつ、帰り支度に入った。予想外の額に換金できたことはうれしかったが、複雑な気分でもあった。

「やみつきになりそうだな」という思いがちらりかすんだ。事実、もう1回だけなら、と次の休日も同じ店に入った。大きな金額ではないがまた儲かった。翌週も通った。ゴルフセットを買い替えたいと、前から考えていた。この調子なら簡単に資金が得られそうだ。こう考えた時、パチンコに向かう気持ちにも変化があったのだろうか。戦う交感神経が前面に出た。小刻みな玉の出入りに、興奮と焦りの感情が交差した。結果は、これまでの儲けを越す出費だった。

### 休日は一日中、夜勤前も妻にウソ、職場では虚ろ

「依存の入り口にいたんですね。すでに、あの時」とSさんは述べ懐した。冷静さを失っていたSさんには後の祭りだった。

興奮と焦りの感情が、職場のストレスから逃避するパチンコへと押し立てた。週1回、夜50分の「至福の遊び」から、休日は一日中、夜勤前の日中へとエスカレートし

ていった。Mのことは頭から消えていた。妻には、「新しい業務の打ち合わせ」とか、「ゴルフの打ちっぱなしに行ってくる」「退職した先輩に呼ばれた」など、思いつくままのウソをついた。時々子どものための玩具やサッカーボールなどを買って来た。

そんな生活が3か月。短期間なのに、自分名義の貯金通帳も底までついてきた。仕事に影響が出ないわけがない。虚ろな目、あいまいな指示を、上司から何度も注意された。ひたすら謝りつづけた。パチンコはやめたかった。しかしやめられない。誰か自分を止めてくれ、というのが正直なところだった。

### 「おかしい」と知らされて妻は涙を浮かべて諫めた

ある晩、珍しく夫婦二人だけの時間だった。お茶を飲みながら、妻が静かに話しかけてきた。

「最近、疲れているんじゃない」「ああ、忙しすぎた。心配かけてすまない。大丈夫だ」

「いびきも寝言もすごいよ。よし、この調子だ、なんて。何度も寝返りを打って」

「仕事の夢を見ているのかな」「いつからだだったの？パチンコ。隠したってダメよ。もう」

Sさんは絶句した。知っていたのか。ばれたのか……

妻が知ったのはMからの情報だった。Mは骨折も治り、リハビリも順調で、遊びに限定したパチンコなどで職場復帰の準備をしていたという。何度かSさんの姿を見かけてびっくりし、パチンコ台に向かっている時の表情が別人のようだと殺気立っていたことに不安を感じていた。声をかけられる状態ではなかったという。「おかしいやっぱ奥さんに知らせておきたい」と、復帰準備のために出勤した日に、食堂を訪ねてきたのだった。

「Mさんの話が辻褄が合ったの。おかしい、おかしい、と思っていたことが、すべてわかったの。理由は聞かないから、お願い、もうやめて、親にも黙っているから」と妻は涙を浮かべながらおじぎしてきた。「お父さん、全然遊んで

くれなくなったね、って子供たちも寂しがっているのよ」

### 逆に自分を心配していた元部下に「すまなかった」

Sさんはずっとつむいたままだった。妻と目を合わせることができなかった。ちよつと間をおいてから、小さく「すまない」と声を発するのが精いっぱいだった。二人の子供の顔が浮かんだ。「Mさんを責めないでね。あなたを心配して、勇気を出して教えてくれたんだから。むしろ感謝してほしいの」と妻は語った。すべてが胸にずしん、ずしんと響く妻の言葉だった。

気持ちの整理がつくまでには数日必要だった。Mが復帰していたことを知らなかった自分を恥じた。あるいは誰かが教えてくれたのだろうが何も覚えていない。

昼食休憩の時間、会議室を借りてMと二人きりになった。「すまなかった」と素直に詫言った。Mは恐縮しきった表情だったが、安堵

していることが分かった。「元のようなりーダーに戻ってください。みんな心配していました」というMに、恥ずかしくて返す言葉がなかった。夜遅くパチンコ店で見かけたことを話したら、「夜更かしにも少しは慣れておかないか」と思っ、30分だけの遊びでした。夜は4、5回だけかな」

ミイラ取りがミイラになった、というのはこのことだろうか。あの晩、Mの姿を見かけなかったら……。ちよつとした偶然がきっかけでのめりこんでいった。そこから救ってくれたのも、Mが自分を見かけた偶然の結果だったのか、とSさんは振り返った。代償は決して小さくはなかったが、挽回はできると思い直した。

#### 柏木勇一（かしわぎ ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士